

日本の英知が集結する令和の水滸伝②

編集部

今号からは、『智の梁山泊』に係る

日本の「智の巨人」が、オンラインセミナーにおいて展開した講義内容を中心に、『智の梁山泊』のさまざまな視点と活動を紹介したい。

今号では、『智の梁山泊』の中心的存在のおひとりである金山秋男明治大学名誉教授の行った講義内容とフィールドワークを「紹介したい」。

十牛図解説

前号で紹介した『智の梁山泊』の中心的存在のおひとりである金山秋男明治大学名誉教授は、そもそもご自身がかつて罹った神経症を機に曹洞宗の大本山である總持寺での禅修行を行い、そこから宗祖道元の『正法眼蔵』の「生死の巻」をきっかけに死生学研究を開始した。専攻は死生学、宗教民俗学。野生の科学研究所副所長を歴任、現在も死生学・基層文化、明治大学死生学・基層文化研究所代表、国際熊野学会副代表な

どを務められている。

そうした背景から、専門である死生学に基づいた「禅」の研究者としても広く知られており、著書に『歎異抄』、共著に『生と死』の図像学、『古典にみる日本人の生と死』などがある。

2022年10月に行われた『智の梁山泊』のオンラインセミナーにおいて、金山氏が説かれたのは、禅の極意である「悟り」を視覚的に掴むことができるよう、牛を題材にした十枚の絵によって「悟り」のプロセスを描き表した「十牛図」であった。

「十牛図」にはいくつかの種類があるが、金山氏が取り上げたのは、もともと著名とされる廓庵師遠かくあんしおん禅師が描いた「十牛図」である。廓庵師遠禅師は、中国宋代の臨済宗楊岐派の禅僧であり、廓庵禅師は10枚の絵を描き、1枚1枚に頌じゆと呼ばれる詩文を添えたものが、そもそもの「十牛図」である。このように「十牛図」を辿ってくる

と、その修道過程が一本道ではないことがわかる。この一連の図の眼目は⑧にあり、⑦から⑧の間には決定的な飛躍がある。ここではそれまでの何かを求めて、つかまえて、そして忘れるという人間の営みが悉く空ぜられている。

⑦は普通は修道の完成だが、⑧ではそれも妄念として離却されねばならない。それが色即是空の極点。しかし活禅はその絶対無とどまりはしない。空もまた空とばかりに色の世界に蘇り、無碍自在に万物を成仏させるのである。その悟達の境位を中国後秦の仏僧である僧肇は、「天地と我同根、万物と我一体」と喝破している。

金山氏は、この序文を交えて「十牛図」の解説を行い、「禅」の「さとり」とは何なのかを2時間×2回、計4時間にかけて展開された。

では、その「十牛図」の内容だが、廓庵禅師の「十牛図」は次の10項目から成り立っている。

① 尋牛

牛を尋ねる。↓ 自己の問題に行き詰まり、自己破綻し、自分探しの旅がはじまる。

② 見跡

牛の足跡を見つめる。↓ 経典を学び、提唱を聞いて法理的に歩むべき方向の見当がついた。

③ 見牛

牛を見つめる。↓ 経や教によって得られた心理が行を通じて身体化され、自己化される途が開ける。

④ 得牛

牛を得る。↓ いよいよ分裂から統一への心身学道の始まりである。牛との手綱はまだ緊張しており、修行による厳しい統一への努力を示唆している。

⑤ 牧牛

牛を手なずける。↓ これまでの別々であった牛と人が統一に向かう。分裂の力が統一へとゆるめられ、行が「安楽の法門」といわれる本来のあり方をあらわしてくる。

⑥ 騎牛帰家

牛に乗って家に帰る。↓ 人と牛は一体化し、そこに生まれる余裕と自然さは周囲と響き合い詩情を生み、笛の調べとなる。

『智の梁山泊』

⑦忘牛存人

牛を忘れて、ただ人だけがある。↓
牛の姿は人と同化し見えなくなる。牛が完全に自己化され、その姿は見えなくなる。

⑧人牛俱忘

人も牛も忘れ去る。↓ 迷いがすっかり脱落され、同様に悟りも空却されている。肯定も否定も絶した絶対無が開かれる。

⑨返本還源

原初の自分に還った。↓ 絶対無をくぐり抜け、水は水、花は花という存在となり、すべてが始まる以前に帰する。

⑩入麴垂手

氣ままに町へと向かい、人と接する。↓ 真の自己は涅槃に腰を落ち着けず、巷に出て人と交わり、酒屋や魚屋にいる衆生を感化し、成仏させる。

これが「十牛図」の概要だが、金山氏のオンラインセミナー講義では、幅広い範疇にまつわる言及とともに、聴講した方たちからの活発な質問や発言が相次いだ。

これこそが『智の梁山泊』そのものであり、まさに知的好奇心が滾々と湧き出る泉のようなひと時であった。

京都巡礼

金山氏が副代表を務める「国際熊野学会」が、世界遺産熊野古道と一緒に歩き案内する「熊野本宮語り部の会」の方たちの研修を兼ねて実施する京都を中心として巡礼に参加するというこ

とで、本誌も同行が許された。京都市内を中心にバスで熊野権現ゆかりの地を巡り、ガイドに役立つ情報を研鑽しようという趣旨の集いであったが、その京都市内の数カ所にご一緒させていただいたのだ。

「中央の熊野神社巡り」と題され、白河・後白河上皇と熊野修験本山派と副題がつけられた研修の旅の京都編は、次の3カ所を巡った。

- 新熊野神社（京都市東山区今熊野）
- 聖護院（京都市左京区聖護院中町）



新熊野神社

○熊野若王子神社（京都市左京区若王子町）

先導していたのは、国際熊野学会代表委員で熊野三山協議会幹事の山本殖生、熊野本宮語り部の会会長の松本純一の両氏で、和歌山から同行したおよそ30名の「語り部」の方たちに巡礼先やバス車内で惜しみなく情報を伝達していた。

金山氏は午後だけの同行だったが、山本氏、松本氏とも旧知の間柄であり、語り部の皆さんとも積極的に交流していた。

さらに京都巡礼の一行と分かれた後は宿泊先となる東本願寺ゆかりの「砺波詰所」に赴いた。ここは4度の火災による消失に遭った東本願寺の再建のため、地方から上京してきた人足奉仕団の寄宿舎だった施設で、明治期の再建完了後は門徒のための宿泊所となり、現在では一般にも開放され誰でも宿泊できる場所である。

出口三平氏との語り

本誌のために、金山氏は翌日の午前、京都府北部綾部にお住いの出口三平氏を呼んでくださった。出口氏は宗教学哲学研究者として知られ、京都大学

文学部哲学科宗教学卒業後、大本の教学研鑽所に勤務し、その後主に、出口王仁三郎の宗教思想や活動を研究されている方で、もちろん『智の梁山泊』の主要メンバーの1人である。

新宗教「大本」の2大教祖の1人である出口三平氏のお話は、おふたりのご専門である、日本のさまざまな信仰へと飛翔し、今回の旅のテーマであった熊野信仰から、伊勢信仰へと波及し、その背景にある農耕民族文化と狩猟民族文化の違いという文化論にまで及び、時代背景は遙か神代から飛鳥、そして現代にまでタイムスリップし、汲めど

尽きぬ泉のごとく縦横無尽に砺波詰所の空間を駆け巡った。知識人とはかくあるべし。まさに『智の梁山泊』の面目躍如という時間であった。

次号からも、『智の梁山泊』を支える偉大な方たちのお話を中心に、さまざまな話題をご紹介します。

丹生晃市氏は高野山住職ではありませんでした。お詫びして訂正いたします。